

---

# 落合さん、ごめんなさい

白駒の池

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

落合さん、ごめんなさい

### 【Nコード】

N8585S

### 【作者名】

白駒の池

### 【あらすじ】

保育園が足りないという。本当に足りないの？本当に働いているお母さんだけかしら？本当に必要としている人は、「今働くことができていない人」なのではないかしら？日常の中のほんの小さな疑問が大きくなっていく…

## 1 小さな勇気のはじまり

「ねえ、ママ。」  
「なに?」

「この長〜い坂があるから、みすずの保育園は長坂保育園っていうの?」

母・綾子に手をひかれ、この時6歳になったわたしは、長い坂を登っていた。

「そうよ、長〜い坂があるから、長坂保育園、っていうのよ。」  
「ふうん。短かったら、名前なんだったかなあ。」

この地は多摩川に向かって急勾配の傾斜地が続き、多少の遠回りしようが、長い坂道が続く。どの坂道を登っても、年長としても体格の良い私でさえ、途中、必ず、こうして休憩が必要となった。

私はいつも坂の真ん中少し手前の、坂がほんの一瞬だけ緩やかになった、緑川さんちの玄関前で足を止める。

そうすると、

「あら、みすずちゃん。おはよう!」

と、3回に1回は大きなお屋敷の中から、緑川さんちのおばあちやまが出てきて、

「はい」

と、飴玉を口に入れてくれたのだった。

ママは、

「虫歯ができちゃう」

って言う風に、怖い顔をしていた事もあったけど、いつの間にか緑川さんちのおばあちやまとすごく親しくなって、

「いただきますい。」

って、につこり口に入れてくれた。

それは、ほんとうに記憶の隅の隅にある、だけど、忘れられない、どこまでが本当に記憶なのか、母から聞いた思い出話なのか、お友

達との空想なのか、小さな勇気のお話…

みすずが、3歳になる少し前から通い始めた長坂保育園は、みすずのマンションからは、この長坂を登りきったところにある。みすずのマンションは坂を下りきったところだ。距離にして、百メートルあるかないかのこの坂が、毎日のみすずの行く手を阻んでいた。天候の穏やかな時ばかりではない。雨や雪だからと言って、綾子は仕事を休むわけには行かず、脚がおぼつかない幼子の頃は、ひたすらベビーカーを押し、登りきれないようにしてから、しっかりと手を引いて、みすずの興味が坂の長さにかからないように、童話やなぞなぞ、しりとりをしながら、とにかく綾子は必死で坂を登り続けた。が、どうしてもイヤイヤして歩いてくれなくなる時がある。とてもじゃないが、仕事用のバッグを持ち、保育園の荷物を持ち、みすずを抱っこなんてできるわけがない、

「さっさと歩きなさい。」

と、感情的に怒ったりもした。そして、その反動で、大泣きされて、目の前に立ちはだかる長い坂に、綾子自身が嫌気を感じ始めたその時、

「おや、どうかしたのかな？」

と、声をかけてくれたのが、この地では大地主だと評判の、緑川家のおばあちゃまだった。

「いやになっちゃうよね。この坂じゃ。」

緑川夫人は、にっこり笑ってそう言うと、みすずの手のひらに、きれいな色のセロファンでくるまれた飴玉を、一つのせてくれた。それが嬉しくて、みすずは坂の真ん中あたりにある、緑川家の前まで来ると、休憩するのが日課になってしまっていた。

緑川夫人がくれる、その飴玉は、いつも違う色のセロファンでくるまれていて、それが楽しみでもあった。会えない日は、みすずは門の外から、覗き込んだりしていたこともあった。そうするとママは、

「もう、恥ずかしいからやめてちょうだい。おばあちゃまはまた明日よ。」

と、言ってみすずの手を引き坂を登った。

緑川夫人から飴玉も貰いたいのだけど、その姿を見ない日がずいぶんと長く続いていて、このところ、みすずは少し元気がない。

「おばあちゃま、どうしちゃったのかな？」

おとといくらいから、毎朝、みすずが門の中を覗き込むようになり、綾子も

『病気なのかな』

と、少し気にはなっていた。だけど、毎日の生活で手いっぱい。

とても、坂の途中の、親切なおばあちゃまの様子を、気にかけている余裕などなく、

「今週も今日一日でおしまいだから、あと半分頑張って登ろうね」

と、綾子はみすずの手をひくようにして、緑川家の前をあとにした。

坂をようやく登りきると、そこには広い敷地に清潔な園舎。真新しい遊具が並ぶ、「長坂保育園」があった。

「あつ、みどりちゃんだ。みどりちゃんああん。」

みすずは、張り裂けんばかりの大きな声で、交差点の向こうで、赤信号が変わるのを待っているみどりを見つけて、手を振った。

待ちきれないと言わんばかりに、前傾姿勢をとるみどりは、母に後ろから支えられるようにして、やはりこちらに手を振っている。

毎朝繰り広げられる、子供たちの賑やかな光景だった。

実は、この地に保育園ができる事になった時、ご近所からはかなりの反対があったそうだ。どこでもよくある話らしい。なぜってそれは、保育園は近所では「迷惑施設」でしかないらしいから。といっても、それは坂の上での出来事で、坂の下に住む結城家には何も聞こえてはこなかった。

「長い間ここは、空き地になっていたけど、昔は大きなブドウ畑があっただらしいよ。」

と、近所の誰かが言っていた。

『観光果樹園』があつて、たくさんの人がブドウ狩りに来たりして、結構にぎわっていたらしいが、

「ちよつとした事件があつて、いつの間にか空き地になつて、ずっとずっと空き地だったところに、長坂保育園ができたんだよ。」

とみすず一家が知つたのは、ずいぶん後になつてからだつた。

## 2 うんていの秘密

午前中、長坂保育園の園庭には、南からの日差しが燦々と降り注ぎ、南側の窓からは、多摩川が望めた。いわゆる南傾斜地なので、陽を遮るものはなく、緑川さんちの竹林のお陰で、夏だつて、まるで草原か何かにいるような、涼しい風が吹き抜けた。贅沢過ぎる場所にその保育園はあった。

今、おてんば盛りのみすずの興味は、園庭の一番西側奥にある、長い雲梯に注がれている。今年の夏休み、みすずはパパに連れて行ってもらった公園で、始めて雲梯に挑戦した。すいすい進むパパの横で、なかなかできなくて、悔しくて、みすずはパパの腕の中で泣いた。だけど、負けず嫌いのみすずを良く知っているパパは、お休みの間ずっとみすずに付き合ってくれて、一週間ほどのお休みの終わりには、雲梯の端から端まで渡れるようになったのだ。だから、保育園のみんなに、

「私ね、こんなに出来るんだよ。」

って見せたくて仕方ないのに、保育園ではいつまでたつても雲梯ができない。なぜって、それは雲梯に黄色と黒でできた、まだら模様のロープが張られていて、そこには

「ここであそんでだめ」

と、書かれた張り紙がしてあるからだ。さらには、ご丁寧に、その雲梯よりも遙か手前で、黄色のポールが立てられていて、そのポールにもロープが張られ、近づけないようになっていたのだ。

「先生。アタシ、『うんてい』したい。」

この夏、みすずは何度もそう言つて、先生に訴えたのだが、担任の遠藤先生も、外遊びを見てくれるパートの原先生も遠野先生も、「だめって書いてあるでしょ。違うので遊ばうね」

そう言つて、取り合ってくれなかった。でも、どうしてもやりた

いみすずは、家でもパパやママに、

「なんでやらしてくれないのかな。やれるように、パパやママからお願いしてよ。」

と、盛んに訴えていたのだった。

東西に長く広がる園庭の、ちょうど西側に引かれたそのロープは、園庭を五分の一くらい仕切ってはいたが、それでも、園児たちが体を動かすのには十分な広さだった。現に、

『危ないから』という保育園側の説明に親たちは差して疑問も持たず、そのロープの本当に意味に、気付く事はもちろん、疑問を持つ親はいなかったようだ。

みすずは考えた。どうしたら、保育園の雲梯で、みどりちゃんと遊べるかって。

「アタシ、パパと練習して、うんていできるようになったんだよ。」

「え〜すごい！。見た〜い。」

って、みどりちゃんに言われたみすずは、そつと先生の目を盗むように近づいて、やってみせようとした瞬間、先生にみつかった。『だめ』

と、叱られた。みすずがあんまりやりたがるので、庭で遊ぶ時には先生が園庭の端っこに立って、みすずが近寄らないように、先生の目が光っていた。

その日のお迎えの時、綾子は朝持っていたお仕事用の鞆の他に、もう一つ、紙袋を提げていた。

「これ、なあに？」

とみすずが訊くと、

「緑川さんちへのお見舞いよ」

そう言っつて、中をのぞかせてくれた。駅前のイタリヤーノのクッキーだった。

「みすずの分はちゃんと買ってあるから。」

と言うと、仕事用のバッグの中をのぞかせてくれた。

「やったあ」

みすずはジャンプして喜んだ。

「いつも、緑川さんちのおばあちゃまに飴玉をいただいているでしょう。今日は帰りにちよっと寄って、様子をうかがって、お菓子を置いて帰りましょうね。」

と綾子は言った。

「おばあちゃま、病気かな」

と言うと、綾子は、

「ちよっと心配よね。今までたくさん頂いた飴玉のお礼に、クッキー置きに行こうね。」

とみすずをみて、にっこりした。

登り坂は嫌になるけど、いつも保育園の帰り道はあつという間でおまけに今日は緑川さんちの前で立ち止まったので、みすずは歩いた気がしなかった。綾子がチャイムを押すと

「はい。どなたでしょう。」

という声が聞こえ、

「いつも、子供がおばあちゃまに飴玉をいただいている、結城と申します。」

と、綾子が答えると、ぎいっと門が自動であいて、

「どうぞ」

と聞こえた。

中は門から玄関まで、まるでお城か何かのように長い石畳があって、もうそれだけで、みすずは興奮した。

「保育園より広いね。」

みすずがそう言った緑川家の庭は、一面秋のバラで埋め尽くされていて、とてもよい匂いだった。玄関先には、お手伝いさんのような人が立っていて、

「大奥様がお会いになるそうです。」

と言って、中まで通してくれた。

正直、綾子は後悔した。そっとクッキーをおいて、さっさと帰っ

の方が良かったのではないかと思つたのだ。まさか家の中まで通されると思わず、ましてや、門の中がこんなに立派だとは知らず、心臓がドキドキしていた。

「いらっしやい」

そう言つて、緑川夫人が、車いすに乗つて、右足の膝から下に包帯をぐるぐる巻きにして、みすずたちの前に現れた。

「おばあちゃん、どうしたの？」

みすずは、ソファーから体を乗り出すようにして、隣に座つていた綾子に

「こらっ」

と、膝を叩かれた。

「階段から落ちてしまつてね。」

緑川夫人はそう言つて、みすずになつこりほほ笑んだ。

「すみません。突然やつてきまして。この子が、このところ、緑川さんにお目にかかれないのを、毎日のように気にかけておりまして、病気なのかもと、やつてまいりました。少しばかりでお恥ずかしいのですが、どうぞ、これを。」

と、言つて、駅前で買つてきたお菓子差し出した。

「まあ、嬉しい。動く事が出来ないものだから、甘いものはとてもうれしいわ。」

緑川夫人はそう言つと、とてもうれしそうにしながら、そのあと、何度も

「ご心配いただいた上に、お心使いだいて」

と、何度も頭を下げていた。みすずには、

「元気に歩けるようになったら、また飴玉持つて待つてるからね。ママを困らせちゃだめよ。」

そう言つて、やつぱり、

「ありがとう」

と、何度もおじきしていた。

その後、「すぐに用意させるから、食事していつて。」と、緑川夫人は言ったのだけど、  
「主人がもう帰ってきますから。」と綾子は丁寧に頭を下げ、自宅に戻ったのだった。

帰るとすぐに、綾子が、

「あゝ、すごいお屋敷だったわね。緑川さんちって何食べるのかしらっ。」

と下世話に言うので、みすずが、

「そんなに気になるなら、ご馳走になればよかったじゃん。」

と言うと、近くにあった新聞紙で頭をパンッと叩いて、

「食べた気しないよ、きつと。」

と、貴彦と目を合わせて笑っていた。

その日、我が家はスパゲッティだったのだけど、寝る頃になって、  
「きつとおんなじスパゲッティでも、緑川さんちとは味も見た目も違うんだらうな。」

と、貴彦が余計なひと言を言ったので、

「どうせそうよ。」

と、綾子はまるで子供のように、拗ねていた。すると、みすずが、

「じゃあさ、今度パパとみすずと一緒に行って食べてこようよ。」

と、屈託のない笑顔を見せたのだった。

それから、しばらく経つても、緑川夫人は、脚の具合が良くないのか、待っても待っても外には出てきてくれなかった。

### 3 入りたくても入れない不思議なところ

ある夜の事だった。

「だからさ、俺に何をしろって言うんだよ。」

貴彦の声がいつもより上ずって大きくなっている。傍で聞いているたみすが不安げに、

「ママ、パパは誰としゃべってるの？」

電話の向こうの相手を気にしていた。

「道子おばちゃまよ。大丈夫よ、喧嘩しているわけじゃないから。」

もう20分近く、貴彦は2つ下の実妹の道子と声を荒げながらしゃべっていた。

「だから、綾子は関係ないだろう。」

みすずは、最近、道子おばちゃまとパパやママが、大きな声で電話している事で、何かあった事を敏感に感じていた。

「ねえ、ママ。パパはどうしちゃったの？」

「どうもしない。大丈夫よ。」

綾子は区役所で働いている。区役所の住民票やいろいろな証明書を窓口で発行する係だ。その綾子あてにこのところ、貴彦の妹から何度となく電話がかかって来ている。

貴彦の妹は、貴彦と綾子の住むマンションからはかなり距離があるものの、同一区に住んでおり、来年の春1歳になる子供が一人いる。小さいながらも堅実経営している嫁ぎ先の印刷会社で夫は働いており、妊娠が分かるまでは、その印刷会社を手伝っていた。妊娠が分かったあとは、「元気な子供を産んでほしい」という嫁ぎ先の義両親の意向もあり、仕事を休んでいた。本来なら、小学校に入るまでは、「育児に専念してほしい」と言っていた義両親だったのだが、折からの不況で雇っていた従業員をあらかじめ解雇してしまい、その代わりの働き手として、貴彦の妹道子が復帰せざるを得ない状況になってしまったのだった。道子は仕事が好きだ。働くのも決し

て嫌ではない。でも、今は、1歳になる子供がいる。その子を預ける事が出来ない限り、嫁ぎ先の仕事を手伝う事は出来ないのだ。実際、わが子を預ける、という段になって、はたと困ってしまった。もともと、貴彦や綾子の住む区は、いわゆる「激戦区」で、希望どおりに保育園に入れる子供はとも少ない。共働きでやってきた貴彦と綾子でさえ、公立の保育園に入れるようになったのは、みすずが2歳になってからだだった。それまでは、私立の所謂 無認可保育園 にみすずを預け、保育園に入るための点数を稼いだ。結果的にはその事で、預け入れの点数が上がりようやく、公立の認可園に入園できた。道子は、例えば、まだ、無認可園にも入れておらず、とても子供を預けて働けるような状況ではなかった。無認可ともなると、月に7、8万はかかることとなり、働かないうちにはそんな費用を捻出できず、春からの募集に応募してはあるものの、受け入れ決定の通知は届かなかった。

道子だって仕方が無い事くらい良くわかっている。自分だけ、何とかして欲しい、と思ったところで、あっちでもこっちでも順番待ちばかりで入れるはずが無い事は良くわかっているのだ。だが、嫁ぎ先にはそんな事情が通用するはずはなかった。それくらい、困窮していたのだ。毎日のように、義両親から、

「なんとかならないのか」

とせつつかれた。春になれば、という期待もあったが、もし、どうにもならない期待をさせて裏切る様な結果になれば、せつかくうまくやってきた、嫁ぎ先との間にもひびが入る事になるだろう。そんなこんなで、道子は藁をもすがる思いで綾子にすがったのだ。

綾子は区役所の職員だ。なんとか頼み込めば入れるのではないか。自分が頭を下げに行ってもいい。担当の人を紹介してくれるだけでもいい。とにかく、道子は居ても立ってもいらなかったのだ。

そんな思いが道子にはあった。同じように働く身の上なのだから、綾子も自分に協力してくれるに違いない。毎日のように電話をした。でも、綾子はつれなかった。

綾子にしてみれば、どうにもこうにも力を貸すことができなかった。顔見知り程度の役所の人間を紹介されて、道子はどうするつもりなのだろう。自分には紹介するだけの縁故もなく、職場での地位もない。私にどうしろ、と云うのだ、と思っているうち、貴彦と連夜のように夫婦げんかになってしまった。貴彦は、断ればいい、という。義妹と保育園の事などで言い争っても仕方が無い。「自分にはそんな力もないし、そう言う事は通じない。」何度そう説明しても、道子には理解してもらえなかった。もしも、綾子にそんな力があつて、仮に綾子が頭を下げて、自分達には姪にあたる道子のことろの子供が保育園に入園出来たとして、そのあと、綾子に降りかかるであろう嫌疑について、道子は何も考えないのか。これから先の綾子の仕事の立場を考えて欲しい、そう貴彦は思ったのだ。それから、毎晩のようにかかってくる電話には、貴彦が出た。電話の向こうで泣く道子に声を荒げてしまう事もあつた。

綾子だつて、協力したい。保育園に入れるかどうか、それがどんなに大変な事なのか身をもって体験しているのだから。綾子は道子に言った。

「とにかく、一度、無認可に預け入れをする事。」

だが、そんな事をしても入れる保証はない。道子はどうしたら入れるのか、必死でネットで調べた。調べて、また悩んだ。そこには、本当なのか嘘なのか、信じられないくらいの情報が並べ立てられていた。

「とにかく、しばらくは、おんぶ紐でおんぶしてでも働いたらどうだ。」

貴彦のその言葉に、道子は逆上した。逆上して、電話で言い争いになったのだつた。

綾子だつてどうにかしてあげたいが、どうする事も出来なかったのだつた。

「保育園に入れるかどうか、本当に大変な事なんだな。」

ふつと貴彦の漏らしたその言葉に、綾子は頷いた。

そんなことがつづいたある日。いつものように保育園の園庭でみずずは、庭木がさっぱりしている事に気がついた。周りの友達も気がついていたようだ。

「木、切っちゃったの？」

みずずが訊くと、先生は丁寧に教えてくれた。

「今の季節にきれいにしてあげるとね、来年の春にまた、ぐんと大きくなって、きれいな花を咲かせてくれるんだよ。」

そう言われて、子供たちが、さっきまでは、「かわいそうだよねえ」と言っていたのに、「そっか、そっか」と納得したようだ。

「来年が楽しみだよな」

と、みずずが言うと、

「でも、みんなは来年の春には、小学生なんだよ。ここには、もう来ないんだ。」

と、担任の遠藤が言った。

「え〜やだ。絶対、やだ〜。」

と、子供たちが口ぐちに言い、一瞬のうちに園庭がにぎやかになった。その時だった。

「いい加減にしろ。煩いって何度言ったらわかるんだ！」

園庭のちょうど真西の、あのロープの先の、雲梯よりももっと先、隣接する隣のお宅の東側の雨戸が、ガラッと開いて、その家のおじいさんが、園庭ではしゃいでいた子供たちに怒鳴ったのだ。

「殺されたくなかったら、静かにしろ！」

#### 4 保育園の周りは違法駐車連続

あまりの言葉に、シンとなった子供たちの肩を抱くようにして、  
「今日は中で遊ぼう」

と、遠藤は言った。園舎にはいつても、凍りついたようになった子供たちの表情は硬いままで、

「こころすって」

と、裕也は泣きべそをかいていた。

「あのおじいさん、いつもいつも、僕の家族に意地悪ばかり言うんだ。」

そう言って、震えるように泣き出すと、その場にいたほとんどが、つられるように泣き出した。みな、怖がってすっかり縮んでしまったようだった。

遠藤は、近くにいた園長の堀田に何か囁くと、園長は、

「まあ。」

と言って園長室に消えていった。遠藤は、他の職員と子供たちの様子を見ていたが、子供たちのショックはかなりの様で、なかなか涙の止まらない子供がいた。

ちょうどその時、風邪気味で病院に寄ってきたという、あやのが母親とやってきた。あやのは、みすずと違って、遠くから通ってきている。近所の公立はどこもかしもいっぱい、この保育園はかなり遠いんだけど、どうせ、車で出勤だからと、保育園からの、

「車での登園禁止」

という通達を無視し続けている。『どうぞ、何分も停めないからというわけで、隣のお宅の敷地の前に、毎朝当然といった風に停めている。車は、高級外車だった。』

その日は、あやのも薄らなみだぐんでいた。遠藤が気付いて

「どうしたの？」

と訊くと、

「怖いおじさんに怒鳴られたの」

と言い、それっきり黙りこくってしまった。

そして、あやのの母があやのの荷物をしまっている時、

「清水さん、早く、車のところに行つて」

と、玄関のあたりから、事務の篠塚さおりが教室の中にいるあやのの母に声をかけた。何事かと、あやのの母は外にいったきり、園舎の中には戻らなかった。

あの日、保育園の西側の隣にある、落合さんは、度重なる違法駐車に腹をすえかねて、違法駐車していた、あやのの母、清水雪乃に注意を与え、「何も迷惑かけてない」と、開き直った雪乃の態度が許せなくて、とうとう警察を呼んだのだった。雪乃が車を停めていたのは、落合さんちの西側にある道路で、そこはそもそも駐車禁止区域なので、どんな理由をつけたところで、雪乃が車を停めていたこと自体言い逃れできず、落合さんに至っては、何度も交通の妨げになっていて、事あるごとに注意してきたにも関わらず、「子供の保育園の送り迎えの時くらい、大目に見てくれたっていいでしょう。」

と、落合さんに言い返して、通報されてしまったようだ。

おまけにこの日、落合さんは子供たちが、自宅の窓際近くの園庭で、大声を張り上げた事が、余計に怒りを増幅させる結果になり、警察が駆けつけ、清水雪乃が車のところまで戻った時には、頭から湯気が立ち上るほどの鬼の形相だったのだ。警察官の

「落ち着いて」

という言葉は、なんの諫めにもならないほどであった。

そんな騒ぎがあった事を知らずに、綾子がいつものように保育園にみずずをお迎えに行った時のことだった。

「あら、元気ないじゃない。どうしたの？」

いつもなら、とびついて、迎えに行ったことに喜びを表現してく

れるみすずの表情がさえない。いや、よく観察してみると、保育園全体が、しんみりしているように感じる。

「何かありました?」

と、綾子が遠藤に尋ねると、遠藤は重い口を開いた。

「実は、西側にあるご近所のお宅ともめ事が絶えなくて。いろいろ手は尽くしていたつもりだったのですが、今日はとうとう、子供たち相手に怒鳴られてしまいました。どうも、子供たちは、その時の尾を引いているようで、今日はみな元気が出ないようです。」

と、今日あった出来事を話した。

「それで、雲梯って使えないようにしてあったんですか?」

遠藤はうなずいた。

それを聞いていた、裕也の母が、話に入ってきた。

「みすずちゃんちは、家が近くだし、みすずちゃんしかいないから、何もしらないかもしれないけど、お隣のおじいさん、いろいろうるさくてさ。うちなんて、裕也のほかには、上が二人で、下に一人ですよ。保育園のお迎えの時に家に置いてくるわけにもいなくて、全員ひきつれてお迎えに来ると、必ず、『うるさい、さっさと帰れ』って。」

もう、うちだって被害者よ。と云った剣幕で、綾子に

「いやなじいさんよ」

と言って、帰って行った。

## 5 面倒なことは母親が担当する

あまりの言葉に、シンとなった子供たちの肩を抱くようにして、

「今日は中で遊ぼう」

と、遠藤は言った。園舎にはいつても、凍りついたようになった子供たちの表情は硬いままで、

「こころすって」

と、裕也は泣きべそをかいていた。

「あのおじいさん、いつもいつも、僕の家族に意地悪ばかり言うんだ。」

そう言って、震えるように泣き出すと、その場にいたほとんどが、つられるように泣き出した。みな、怖がってすっかり縮んでしまったようだった。

遠藤は、近くにいた園長の堀田に何か囁くと、園長は、

「まあ。」

と言って園長室に消えていった。遠藤は、他の職員と子供たちの様子を見ていたが、子供たちのショックはかなりの様で、なかなか涙の止まらない子供がいた。

ちょうどその時、風邪気味で病院に寄ってきたという、あやのが母親とやってきた。あやのは、みすずと違って、遠くから通ってきている。近所の公立はどこもかしもいっばいで、この保育園はかなり遠いんだけど、どうせ、車で出勤だからと、保育園からの、

「車での登園禁止」

という通達を無視し続けている。『どうぞ、何分も停めないからというわけで、隣のお宅の敷地の前に、毎朝当然といった風に停めている。車は、高級外車だった。

その日は、あやのも薄らなみだぐんでいた。遠藤が気付いて

「どうしたの？」

と訊くと、

「怖いおじさんに怒鳴られたの」

と言い、それっきり黙りこくってしまった。

そして、あやのの母があやのの荷物をしまっている時、

「清水さん、早く、車のところに行つて」

と、玄関のあたりから、事務の篠塚さおりが教室の中にいるあやのの母に声をかけた。何事かと、あやのの母は外にいったきり、園舎の中には戻らなかった。

あの日、保育園の西側の隣にある、落合さんは、度重なる違法駐車に腹をすえかねて、違法駐車していた、あやのの母、清水雪乃に注意を与え、「何も迷惑かけてない」と、開き直った雪乃の態度が許せなくて、とうとう警察を呼んだのだった。雪乃が車を停めていたのは、落合さんちの西側にある道路で、そこはそもそも駐車禁止区域なので、どんな理由をつけたところで、雪乃が車を停めていたこと自体言い逃れできず、落合さんに至っては、何度も交通の妨げになっていて、事あるごとに注意してきたにも関わらず、「子供の保育園の送り迎えの時くらい、大目に見てくれたっていいでしょう。」

と、落合さんに言い返して、通報されてしまったようだ。

おまけにこの日、落合さんは子供たちが、自宅の窓際近くの園庭で、大声を張り上げた事が、余計に怒りを増幅させる結果になり、警察が駆けつけ、清水雪乃が車のところまで戻った時には、頭から湯気が立ち上るほどの鬼の形相だったのだ。警察官の

「落ち着いて」

という言葉は、なんの諫めにもならないほどであった。

そんな騒ぎがあった事を知らずに、綾子がいつものように保育園にみずずをお迎えに行った時のことだった。

「あら、元気ないじゃない。どうしたの？」

いつもなら、とびついて、迎えに行ったことに喜びを表現してく

れるみすずの表情がさえない。いや、よく観察してみると、保育園全体が、しんみりしているように感じる。

「何かありました？」

と、綾子が遠藤に尋ねると、遠藤は重い口を開いた。

「実は、西側にあるご近所のお宅ともめ事が絶えなくて。いろいろ手は尽くしていたつもりだったのですが、今日はとうとう、子供たち相手に怒鳴られてしまいました。どうも、子供たちは、その時の尾を引いているようで、今日はみな元気が出ないようです。」

と、今日あった出来事を話した。

「それで、雲梯って使えないようにしてあったんですか？」

遠藤はうなずいた。

それを聞いていた、裕也の母が、話に入ってきた。

「みすずちゃんちは、家が近くだし、みすずちゃんしかいないから、何も知らないかもしれないけど、お隣のおじいさん、いろいろうるさくてさ。うちなんて、裕也のほかには、上が二人で、下に一人ですよ。保育園のお迎えの時に家に置いてくるわけにもいなくて、全員ひきつれてお迎えに来ると、必ず、『うるさい、さっさと帰れ』って。」

もう、うちだって被害者よ。と云った剣幕で、綾子に

「いやなじいさんよ」

と言って、帰って行った。

自宅に帰る時、綾子はみすずの手を握り締めながら言った。

「ちよつとお庭で元気良すぎちゃったのかな？」

すると、みすずは、

「入っちゃだめってロープの近くだったけど、誰も中には入らなかつた。でもね、遠野さんが言ってたけど、今日はお庭の木をたくさん切ったから、隣のおうちにいっぱい声が聞こえちゃったんだって。」

と、消えてしまいそうな細い声でみすずは言った。

「そうか、遠野さんがそう言ってたんだ。」

「うん。あとで遠野さんが謝りに行ってくるから、もう大丈夫だよ。って言うってた。」

「そうなんだ。遠野さんが大丈夫だって言うなら、ママ安心した。もう大丈夫よ。」

そういつて、手をつないで帰ったのだが、ショックが大きかったのか、やはり様子がおかしい。いつもなら、帰り道の下り坂はどんなに手をつなごうとしても、『離しちゃだめよ』、と叱っても、ものすごい勢いで、かけ下つてゆくみずずである。だが、その日は、みずず本人が、綾子の手をぎゅっと握りしめて、離そうとはしない。そんな様子が、マンションにたどりついても見受けられ、それは就寝時まで続いた。

布団に入るとみずずは

「ママ、明日、お仕事お休みしちゃだめなの？」

と言い、涙をいっぱい浮かべている。綾子は、翌日は月末処理で、忙しくとても休めるような状況ではなかったのだが、

「わかったから、もう寝なさい」

と言って、部屋の明かりを消した。だが、みずずはなかなか寝付けないようで、ようやく眠りについたのは、日付が変わる頃であった。

当然のことながら、みずずは、翌朝いつものようには起きる事が出来ず、貴彦が

「出来るなら、遅くいくか休むかしてやってくれないか。」

と言う。とりあえず、起きてくるのを待ってみようと思った。甘やかしたくはない。でも、震えて泣くほどの衝撃だったのなら、しっかり受け止めてやろうと、綾子は思ったのだ。

「しかし、ひでえじいさんだよな。子供相手に『殺す』ってさあ。

貴彦はそう言ってそそくさと出勤して言った。

こんな時、綾子はいつも思うのだ。

『男はいいわよね。自分は絶対休まない。面倒なことはみんなこつち。』

みすずが熱を出した、と言えば綾子が休み、会社に遅刻し、早退し、なんとかここまでやってきた。保育園ライフもあと数カ月。あと少しの辛抱って時に、またこんな事になってしまった…。

## 6 「自分の子どもが可愛いと思えるのは自分だけ」という事実気がつかない

みすずは結局、10時を過ぎてようやく目覚め、昼からでもお友達と遊びたい、と言うので、午後からの勤務に間に合うように、綾子と手をつないでマンションの外に出た。すると、もえちゃんが、

「あ、みすずちゃん」

と、大きな声をかけてきた。

もえちゃんは、もえちゃんの母としっかり手をつないでいるが、荷物も何も持っていないかったので、

「あら、今日はお休みなの？」

と、綾子が言った。もえの家は、この長坂よりもずっと川沿いで、少し離れた場所で魚屋を営んでいる、と訊いた事があった。

「ええ、まあ」

もえの母はそう言うと、

「あら、みすずちゃんこそ、こんな遅い時間に……」

というので、

「ちよつと朝寝坊」

と言って別れた。反対方向に歩いてゆくもえちゃんを、みすずは何度も振り返った。

「今日はお休みなんですって」

と、綾子が言うつと、

「もえちゃんって、このごろ、休みばかりなんだよ。」

と、みすずが言った。

「あらそうなの？病気かな。」

「ううん、ママがおうちに居るからって、もえちゃん言ってた。」

「え？ママがおうちに居るの？」

保育園に入ると、そこには数名のお友達しか登園していない。遠藤に事情を聞くと、今日はほとんどが休みなのだと言う。

「昨日のシヨックが消えないのかしら？」

綾子が言つと、

「そついう子供もいるようです」

と、遠藤が目を伏せるように綾子に言った。

「もし、気になる事があるようでしたら、園長がいろいろ対応して  
いますので、そちらに聞いてください。」

綾子はとても気にはなっていたが、それでなくても、月末で忙し  
く、さらには午前中休んでしまったので気が急いで、この上、園長  
先生と話すなどという余裕がなく、気がかりなまま出勤したのだっ  
た。

「りさちゃん。あのさ〜。」

みずずがりさに言った。

「あのね、りさちゃん、昨日お休みだったから知らないと思うけど、  
昨日さ、大変だったんだよ。」

「え〜、何があったのよお。」

「それがさ……………でね……………むね……………  
……………になつてね。」

『ころす』つていつてさ〜。」

「げ〜っ。『ころす』つてなによー！」

と、先生たちがどんなに子供の興味を他に逸らそうとしても、子  
供たちの口には立てられず、実際に、隣家の落合さんが言ったの  
は、

『殺されたくなかったら』

だったのだが、子供たちの間では、

「殺す」つて。

と増幅してしまっていた。

「どつする、殺されちゃたら。」

「え〜、やだよ。アタシ二宮君と結婚するんだもん。」

とみずずが言つと、

「ダメだよ。二宮君は、りさのママが結婚するんだよ。」  
とりさは言ったのだった。

五嶋りさには父親がない。リサの母は今、24歳で、りさを18の時に生んでいて、その事を保護者会で自ら公表した。

「うちには父親はいません。必死で育ててます。」

そう言ったりりさの母を、

「よく平気で言えるよね」

と、さげすんだ態度をとるようになった親もいた。それは、24歳という年齢だけではなく、まだ、若さの絶頂にいたりりさの母は、一見すると、水商売風とも取られかねない、容姿だったせいもあるようだった。

「りさちゃんとは遊んじゃだめ」

という親もいた。だけど、みすずの母・綾子は違っていた。綾子は、りさの母がどんなに礼儀正しく、厳しくしつけられたかを知っている。それは、保護者会のあとの事だった。「では、これで」

と、保護者会が散会となった後、携帯にかかった電話の用件を済ませて、教室に戻った綾子が目にしたのは、保護者の使った紙コップを集めて回っていた、りさの母の姿だった。

皆が、『お先に』という言葉でその場を後にしているその時に、りさの母だけが、教室の中を整理し、床に雑巾がけをしていたのだった。だから、綾子は、他の子が、親からの言いつけを守るかのようには、りさを避けているのが許せない気持ちだった。綾子は事あるごとに、みすずに

「りさちゃんっていい子よね」

「りさちゃんはげんきななの？」

と、りさちゃんを意識させるようにしていた。みすずはりさちゃんを避けることなく、みんなよりちょっと大人びた、りさちゃんを憧れのまなざしで見つめ、仲良くしてきたのだった。

「ふうん、りさちゃんママと結婚するんだ。じゃ、しかたない。」  
と言つて、みすずは少し寂しくなった。若いりさちゃんママは、  
実はみんなの憧れの的である。みすずは、子供ながらに「りさちゃ  
んのママなら負けても仕方ない。」、そう思っていたのである。

「ねえ、パパ。あたしが殺されちゃったらどうする？」

「え？そうだな。3日は泣くだろうな。」

「え、たった3日かよ。」

その夜、なんとなくみすずの様子が気にかかる貴彦は、帰宅した。  
そして、久しぶりにみすずと入浴した。やはり、昨日の落合さんの  
一件が心を重くしているのか、みすずの口から出るのは、その話題  
ばかりである。

「ママは何日泣くかな・・・？」

みすずがそう言つと、

「ママにきいてごらん。すぐに泣いちゃうよ。」

と、貴彦はみすずの頭をこつん、としたのだった。

結婚して10年。貴彦と綾子は子供に恵まれなかった。2度妊娠  
したのだが、そのたびに流産してしまった。綾子はいつも、「母に  
なれない私と離婚してもいいよ」と言い続け、折れそうになる綾子  
を、貴彦は必死で支えて、10年目にして、みすずを授かったのだ  
った。綾子は号泣した。号泣して、母になったのだった。

「私はもう一生泣かないと思う。だって、一生分泣いたから」

が、綾子の口癖だった。だけど、いいや、だからこそ、みすずが  
殺されたりするような事があつたら、綾子は泣くだろう。号泣する  
だろう。そうして、夜叉になるだろうと、貴彦は思った。

その日、みすずが眠りについた後、貴彦は綾子に言った。

「保育園の隣のじいさん、落合さんって言ったっけ？」

みすずを寝かしつけ、うとうとし始めた時だったので、

「んっ」

と、綾子は目を開けた。

「殺してやる。って怒鳴ったじいさん。」

「『殺してやる』なんて言っていないわ。『殺されなくなかったら』よ。」

「どっちだって、かわらないだろ。子供にそんな事言つてさ。」

「この間さ。」

「?」

綾子はベットに横たえていた体を起こして、枕元の明かりをぶちとつつけると、そばにあったカーディガンを羽織つて話をつづけた。「酔っ払った学生が、マンションの前で大トラに変身して大騒ぎしてた時、あなた、なんて言つたか覚えてる?」

「.....」

「あなたは、『うるせえな。しばくぞ!』って言つたのよ。この間、車に乗つて3人で出かけた時も、窓開けて、カーステレオががんにかけてたオープンカーとすれ違ったも、おんなじ事言つたじゃない。」

「俺に喧嘩を売るのがよ」

貴彦も話に熱が入つて、体を起こした。

「そうじゃない。喧嘩なんて売らないけど、子供つて、ほんと、うるさいのよ。私にとって、みすずはようやく巡り合えた天使だけど、あんなちびっちゃんのがたくさんいたら、嫌になるって思ったことない?ほら、一度、みすずの友達預かつた時、あなた、逃げ出したじゃない。」

もう半年くらい前の事である。

「保育園のお友達と家で遊びたい」

と、みすずが言いだし、綾子は、もえちゃんのママにメールしてもえちゃんに遊びに来てもらったのだった。もえちゃんはとても良い子だったのだけど、もえちゃんが家に来てくれた事が嬉しくて嬉しくて仕方がないみすずは、とてもはしゃいで、マンションの部屋の中を駆け回つた。翌日になってから、下の部屋の安西さんには、「お嬢さん、元気だから。」

と、やんわり注意をされたほどだった。

「もえちゃんがやって来て、30分もしないうちにあなたは消えたわ」

貴彦は、そうだったけ？と言った表情をした。

「下の部屋の安西さんのところに、謝りに行くのも着いてきてくれなかった。」

「そうだったつけ？でも、それと今回の『殺してやる』っていうじいさんと関係ないだろうが。」

「関係ないけど、おんなじよ。多分。おんなじ。よそんちの子、可愛いと思う？思わないでしょ？それが普通よ。騒いでいれば、ただうるさいだけ。ひとんちのガキ、百人いて、毎日毎日朝から晩までエネルギー余ってるんだから、絶対うるさいよ。」

「で、子供相手に『殺す』って言うのかよ。」

綾子は、クスッと笑ってしまった。

「あなたの口癖も、関西じゃ、殴る、蹴るの乱暴を働くって事なんでしょ。実際そんな事するわけないって信じているから、何も言わなかったけど、『殺されなくなかったら』と、何も違わないじゃない？」

綾子の言うとおりなので、貴彦は何も言い返せない。

「私ね。みずすが宝物だけど……。宝物だけど、嫌になることだってあるわ。時折、わけもなくいやになるの。だからって、虐待したりはしないわよ。でも、怒鳴ったりすることはあるわ。あの隣の落合さんもきつとおんなじよ。自分の宝物じゃないんだもの。ぶっ飛ばしたいくらい、うるさかったのよ。きつと。」

「だけどさ、お前心配にならないのかよ。何かあったら、ってさ。」

「心配よ。たまらなく心配。」

ふつと両肩を力なく落とす綾子の姿に、やるせなさだけが大きくなつた貴彦だった。

翌朝、綾子の携帯にメールが届いた。送り主は父母会の役員をし

ている、井上みどりの母からであった。

「なにかしら？」

綾子は携帯を覗き込んだ。

『緊急のお知らせ』

父母会からのお知らせです。ご存じの方も多いかと思いますが、過日より、保育園の隣家と駐車違反や子供たちの騒音問題で、トラブルが頻発しております。先日は子供たち相手に激怒された隣家の方が、「殺されなくなかったら」と過激な言葉を使われたらしく、情緒不安定になってしまった子供たちが多いようです。明日19時より保育園にて保育園からの説明を受けますので、余裕のある方は参加ください。取り急ぎ連絡まで。

と、言った内容だった。そっか、様子がおかしかったのはみすずだけじゃないんだ、と綾子は思った。

「ねえ、あなた。明日保育園で説明会だって。」

携帯メールを綾子が貴彦に差し出した。貴彦は、

「お前、聞いとけよ。」

と言って携帯を綾子に戻し、朝刊を読み始めた。

『いつもそうよね』

男なんて冗談じゃないわ、といつも綾子は思う。どうして自分が働いているか、考えた事があるんだろうか。綾子が働く理由、それは家族3人が、食べてゆくため以外の何物でもない。貴彦の収入だけではなんと心もとない、だから、自分は働いている。でも、朝早くから家事を行い、みすずの保育園への送り迎えを行い、また家事をして、睡眠時間を削って、どうにか毎日が廻っている。それなのに、自分は、「仕事だけ」で、何を偉そうに、と言いたくなる事が毎日のようにある。実際、何度もそう言って喧嘩になった。そのたびに、みすずに

「ママはパパが嫌いななの？」

と、言われた。

「ええ、大嫌いよ」

と、その時の感情に任せて答えてしまい、みずずに大泣きされた事があった。

「パパがかわいそうだ。」  
と。

「じゃ、ママは？ママはどうなるのよ」

と言いたいところをぐっと我慢して、その時から、綾子は決して貴彦に文句を言わなくなった。自分が黙って家事と育児と仕事をこなせば、それでうまくいくのだろう、と。号泣したのはこっちだ、と貴彦に喰ってかかりたい事はたくさんある。毎日だつてある。

「雑用を、なんでもかんでもこっちに回すな！」

正直、さっきだつて、そう言い返そうかと思った。でも、我慢した。貴彦はそんなことに気付いてもいないだろう。綾子にはそれがとても口惜しい。

## 7 違法駐車は犯罪だということを認めない

登園の時間になる、ほんの少し前の事だった。急に真っ暗になった雨雲ばかりの天空から、大粒の雨が降って来て、少ししたら止むかも、という淡い期待を裏切るかのような、本降りの雨になってしまった。

「送ってやろうか。」

今日は客先に直行で行くので、いつもより少し遅くいくよ、と言っていた貴彦が、珍しく、坂の上まで車で行ってやる、と言う。

「助かるわ。」

そう、綾子は言った。でもその隣で、なんとなくみすずは嬉しいそうではない。

「あれ、みすず、嫌なの？」

貴彦はみすずの顔を覗き込んだ。

「車でいくとね、怒られちゃうんだよ。隣のおじさんに。みすず、怒られたくないから、歩いていく。」

と言った。

「じゃ、頑張ろう。」

そう言って、みすずは綾子と傘を持ってマンションの外に出た。

マンションの前から続く長い坂は、まるで滝水のような勢いで、雨水を排出していた。

その雨水の中を、黄色の長靴をはいたみすずは必死で登って行った。もう少しでようやく半分あたり、緑川さんちの門のあたりに差し掛かる、というその時に、みすずは歓声を上げた。

「あっ！！やったあ。」

そこには懐かしい緑川夫人が、大きな傘をさして、こちらを向いて立っていたのである。

「おはよう。みすずちゃん。」

笑顔の緑川さんちのおばあちゃまがそこにいた。そして、いつも

のように、

「はい」

ときれいな飴玉を一つくれたのだった。

「こんな雨だからね、みすずちゃんが難儀して、ママを困らせてるんじゃないかと思ってね。雨だけど、こうして待っていたんだよ。よかったよ、会えて。」

緑川夫人は、門のところの屋根の下に、わざわざ椅子を持ってきて、ひざかけをかけて座っていた。隣にお手伝いさんが傘をもって立っていて、

「そろそろ中へ」

と言ったのだけど、久しぶりだから、と、緑川夫人は、ニコニコしながら、みすずの手を握ったのだった。

「おばあちゃま。手が冷たくなっちゃうから、おうちには行ってね。」

「ありがとうね。でも、みすずちゃんもこんな雨の日には、車があると良いんだけどね。」

と、緑川夫人が言った時だった。

「みすずね、隣のおじいちゃんに怒られたくないから、車には乗らないの。」

と、いうみすずの返答に、緑川夫人の表情が一瞬に曇ったのである。

「落合さんと何かあったんだね。」

緑川夫人の浮かない顔に、綾子は、『何かある』と確信したのだが、時間が気になってどうにもならない。そんな様子を察したのか、「さあ、遅れるとママが困るからね。元気に後半分登るんだよ。」そう言って、手を振ってみすずを見送ってくれた。

「ママ、今日何時ころ?」

「いつも通り18時過ぎくらい。」

時計がなんとなくわかるようになってきたみずずは、この頃、帰りは何時かと必ず聞くようになった。

「大丈夫よ。ちゃんと戻ってくるから。」

そういつて、笑顔で別れ、綾子が職場に向かおうとした時だった。「ねえ、ちよつと聞いてくださいよ。」

そういつて、綾子を呼び止めたのは、一つ下のクラスの斎藤タケルの母親だった。

「どうかしたんですか？」

「どうもごうも。車の写真撮られちゃつて。」「車の写真？」

「ええ、さつきからのひどい雨で。どうする事も出来なくて、車で来たんですけどね。ちよつと停めて、荷物持つて、子供の手を引いて降りたとたん、あの、落合つて人が出てきて」

「それで写真？」

「ええ、もう思いつきり、バシャバシャバシャつて。なに？つて思つてる間に、そのまま、家の中に入って行つちやつて。」

「えつ。それで車は？」

「坂を下つたところに駐車場あるじゃないですか、あそこに停めてきました。それで長い坂登つてきたんで、びしょびしょです。」

斎藤タケルの母とタケルは頭からバケツを被つたかのようにびしょ濡れだった。あわてて、保育園の奥から、職員が大きなバスタオルを持つてやつてきたのだった。

「こんなに濡れちゃつて、タケルごめんね。」

タケルの母はそういつてタケルを頭から拭いていた。

「まつたく、ちよつとくらい、あそこに停めて何が悪いつていうんだろう。近くに駐車場がないんだから、しょうがないじゃないか。」

と、タケルの母はブツブツ言いながら、タケルを抱きしめ、ずつと怒つていた。

「風邪引かないように。」

と言つて、綾子はその場所を離れた。

保育園の外に出ると、綾子が出た時より雨が激しくなっている。ここから駅までの10分。坂ではないけれど、商店街を抜けると、長坂駅である。さつきも斎藤タケルの母が言っていたれど、長坂駅から、長坂保育園までの10分足らずの道のりに、どういいうわけか駐車場がない。綾子たち親子の住む、坂下とは違い、みつちりと住宅が立ち並び、コインパーキングがないのだ。だから、つい、保育園の隣の落合さんちの前あたりに停めたくなる。落合さんちは坂のちょうど上にあり、長坂保育園と並んでいる。保育園と落合さんちの前は、大きな幹線道路のだが、落合さんの家は、昔は何台か車を停めていたようで、駐車場のよ様な空地が家の前であつて、少し引つ込んだ感じになっているからか、マナーの悪い駐車違反が多いのだ。駐車違反区域なのだから、取り締まられて当然で、それがわかると今度は、堂々と落合さんちの敷地に乗り上げるようにして車を停めている輩がいて、落合さんを激怒させた。

「怒られるに決まつてるわ。他人の家に入り込んでるんだから。」  
と、綾子と貴彦は話した事があつた。その場所に停めていた何人かの保護者によれば、

落合さんちは、少し前まではずっと留守で、そこに車を停めようが問題にもならず、だれも住んでいない様子がないのを良い事に、違法駐車を繰り返していたらしい。それがある日、落合さんが家に戻り、違法駐車を繰り返していた保護者とトラブルになっているのだ。

そんな事を思い出しながら、ちょうどコンビニの前に差し掛かった時だつた。

「早くして。」

そう言つて車から子供を降ろしていたのは、みすずと大の仲良しの、井上みどりの母だつた。

『おはよう』

と、声を掛けそうになつて、あわてて止めた。

『しらないふりしない』

綾子は見ても見ぬふりをして、急いで通り過ぎたのだった。

小さな子供の手を引き、保育園用の大きな荷物を持つ。そして、雨の日に傘をさす。そんなの無理に決まっている。中には、0歳や1歳の子供を抱っこして、2人連れて登園する親もいる。車で連れて行きたい心情は理解できないわけではない。ただ、あの長い坂を登る結城家だって、車があつたらどんなにラクか…でも、それをいいことに、道路に駐車したり、他人の敷地に勝手に停めたり、用もないコンビニの駐車場に車を停めている。そんな親が、落合さんを怒る資格は全くないわ。

## 8 「子どものため」といえば許されるのか

朝からずっとそんな事ばかりを考えて、綾子のイライラは頂点に達していた。そうして、今朝の緑川夫人の顔色が浮かないことが、なぜ？という疑念を増幅させたのである。

落合さんと何かあったんだね

緑川夫人なら、何か力を貸してくれるのでは、と、綾子は思ったりもした。人一倍正義感の強い綾子は、とにかく違法駐車を繰り返す保護者への憤懣で爆発しそうだった。そんな事を繰り返して、もし、子供に何かあったら、と思わないのかしら。とにかくその日は、仕事にならないほどであった。

次の日の夜、例の説明会の日だった。予定では19時からだったが、子供たちには保育園でおにぎりを用意してくれる、というので、帰り道、綾子はいったん家に帰り、荷物を置き、お茶付けをさらさらと流し込んで、もう一度坂を登った時だった。緑川夫人がちょうど、車でどこからか帰ってきたところで、車から顔を出して、綾子と挨拶をした。そして、

「こんな時間にどうしたのか？」

となり、綾子は実は、と言って、今日の説明会の件を、緑川夫人に話したのだった。

「そうかい、それじゃあ、私も行ってみようかね。」

と、言うつと、緑川夫人は車で長坂保育園に乗りつけたのだった。

綾子は、

「今日の説明会は父母会と保育園の話し合いだから。」

と、緑川夫人に言ったのだが、普段は良識があり、他人の気持ちまで全部わかってくれるような緑川夫人が、この時ばかりは、「言い出したら聴かないよ」とでも言わんばかりの風だったので、綾子

は押されてしまった。

保育園に着くと、もう説明会は始まる様子で、ほとんどの父兄が椅子に座っていた。そこに、綾子と緑川夫人が入って行ったのだ。た。

「まあ、緑川さん。」

堀田園長が、緑川夫人に挨拶をした。隣家であるので、挨拶しても当然だったのだが、綾子はこんな時に緑川夫人が同席したがっていたので、ちよつとたじろいだりもして、堀田園長が好意的だった事にホツとしたのだ。

「近所でもめ事ときいてね、年寄りの好奇心がうずいちゃったんだよ。悪いけど、聞かせておくれ。」

緑川夫人はそう言うのと、一番後ろの方に車いすのまま入って行ったのだ。

「さて、お隣とのいざこざの件ですが。」

堀田園長が静かに話し始めた。それによると、

「以前からお手紙などをお願いしていましたが、何名かお願いしてもご理解いただけない父兄の方がいらっしやるようで、隣家で以前駐車場として使われていたスペースに、他人の家であると言う事実を既に認識されているにも関わらず、再三の注意を無視して、車を停めているご家庭があるようです。その事が根底にあり、子供たちが園庭で遊ぶことにさえも、『うるさい』とクレームが相次いでいます。過日、庭の木を剪定した際に、子供たちが、そちらのお宅の窓際で大きな声を出し、その事がもとで、隣の方から子供たちが怒鳴られてしまい、シヨックで登園出来なくなってしまうたお子さんもいたようで、保育園でも苦慮しております。」

と、いう説明だった。そのことで、父兄の何人かは発言した。そのほとんどが、

「保育園児を連れてくるには、どうしても車があると便利なので、保育園に駐車場があれば、こんなことにはならないのでは？」

「隣のお宅も、車は使われていないようだから、朝ほんの一時車を停めさせてくれたって、罰は当たらないと思う。」

「車を停めたのは悪かったさ。だからって、なんのためになんの権利があつて写真を撮ってるんだ。」

「だいたい、子供相手に『殺す』なんて言葉を使つたりして、いつたい隣はどんな奴が住んでいるんだ。危なくて、子供をあずけられないだろ。」

と、冷静に考えれば、手前勝手に人の迷惑を考えない、飛んでもない意見ばかりだったのだが、『子供たちの安全』という名目のもと、議論は危うい方向に進もうとしたその時だった。

「まったく、いやな連中だねえ」

そう発言したのは、緑川夫人だった。周りは一瞬、「連中」というのが、自分たちを指すとは気がつかなかった。

「お前たちは、それでも、人の親なのかい？近所でトラブルになっているっていうから、ちよつとのぞきに来てみたんだが、まったく情けないねえ。」

慌てて、言葉を発したのは、堀田園長だった。

「待ってください。緑川さん。緑川さんも近所ですし、ぜひお知恵を拝借出来ればと、この場に居ていただいています。あまり、興奮されずに……。」

と、言ったのだが、緑川夫人は実はとても冷静で、興奮していたのは、緑川夫人以外の父兄だけだった。

「あんたたちは、そうやって、自分たちの権利ばかりを口にしながら、隣にだって、静かに暮らす権利や、自分の家の敷地に違法に停められてる車に、文句言う位の権利は持ち合わせているんだよ。要は、あんた達に常識が無いって事だろうが。」

「なんだとつ。」

そう言つて、緑川夫人に喰つてかかったのは、川原裕也の父だった。何日か前、綾子は裕也の母から、裕也は兄弟が多く、日々隣家から、『うるさい、さっさと帰れ』と言われていると聞いていた。

「子供なんて、騒ぐのが商売だろうが。ああだこつだ言ったからって、静かになんてなりやしないさ。子供は宝もんだろう。どうしてもとあったかく見守ってやるうって気にならねえんだ。」

と、言った。すると、緑川夫人は、

「ひとんちの子供、あんた、可愛くてしかたないって言えるのかい？」

そう言うと、川原裕也の父は黙ってしまった。綾子は、居ても立ってもいられず、静かに発言した。

「あのお。」

「なんですか。結城さん。意見でしたら、どうぞ。」

「私。なかなか子供に恵まれなくて、ようやく、本当にようやく母になりました。嬉しくって、宝物です。でも、でも、もうほんと煩い。毎日煩い。居ない生活が長かった分、思うように働けない自分がじれったい。自分の子だって、あんなに煩い。よそんちの子、同じようにかわいいかって言われたら、残念ですけど、正直答えますが、同じようには可愛くはない。それが100人も居たら、煩いに決まっていますよ。毎日朝から晩まで、煩いに決まってると思うんです。」

川原裕也の父親は、ふんつと言った感じで綾子とは目をあわせなかった。

「それでもやつぱり、園庭の端っこをロープで区切って使わせてもらえない、なんて、正直、非常事態なんじゃないですか？ずっと、そうしてきたんなんで、保育園では落合さんと話し合いとか、申し入れとかしてないんですか？」

そう言ったのは、井上みどりの母であった。

「保育園では話し合いも申し入れましたが、落合さんのお宅はお留守も多くて……」

そう堀田園長が言った時、清水綾乃の母が言葉を遮った。

「あら、居ないんだったら、もう少し、子供たちがのびのび出来てもいいんじゃないですか？車もだめ、遊びもだめ、って。保育園な

んですから、ダメって言われてもどうにもなりません。」

「そうよねえ。」

「本当だよ。」

「だいたい、『子供を殺す』なんて言う奴は、警察に突き出してやりやいいんだ。言っただら。『殺す』って。」

と、裕也の父が混ぜっ返して、騒々しくなった。

「落合さんは、『殺す』なんて言ってないわ。」

綾子がそう言うと、裕也の父は、

「あんたはさつきから、どっちの味方なんだよ。言っただよ、『殺す』って。」

と、綾子を突き飛ばさんばかりの勢いで言ったのだった。

「本当に落合さんが、『殺す』って言ったのかい？」

緑川夫人が園長に向かって言った。

「正確に言えば、『殺されたくなかったら、静かにしろ!』です。そう言われて、騒ぎになりました。」

「そうかい、よほど、腹にすえかねたんだろうね。毎日煩い上に、車のトラブルで。うちは、竹垣のせいか、あんまり子供たちの声は聞こえないし、あの坂のせいか、違法駐車もないからねえ、何も知らなかったけど、なんだか、落合さんが気の毒さあ。」

「な、何が気の毒なんですか。被害者は子供でしょ。」

「そうよ、子供だわ。」

親たちが口々に言い、父兄VS緑川夫人で言い争いのようになり収集がつかなくなった。綾子には、緑川夫人が間違っているとは思えない。

「だいたい、あんた、なんの権利があつてここに居るんだい？」

そう言つて緑川さんに喰つてかかったのは、やはり川原裕也の父だった。

「権利かい。言ってみりゃ、落合さんの欠席裁判だつてわけだろ。」

私は、その代わりに来た。被告人代理だね。」

「被告人だなんて。」

そういつて、堀田園長が間を収めようと必死だった。

「まあまあ、みなさん。こちらの緑川さんのおかげで、この園はやっていけるんですよ。静かにしてください。」

一瞬、静寂がやってきた。そうして、緑川夫人は、

「みなさんに、知ってもらった方がいいね」

そういつて、静かに20年前の話を始めた。

## 9 迷惑施設と世の中のルールとマナー

「それはね、もう20年も前の事さ。この保育園は以前はブドウ園だったんだ。こちらあたりは、本当に田舎でね、あちこち畑だったさ。大根畑だったり、ジャガイモ畑だったり。そして、ここはブドウ園だった。秋になると、たくさんの人がやってきたさ。みんな、笑顔で楽しんで帰って行ったんだ。」

隣の落合さんには、一人娘が居てね、結婚して、おなかに赤ちゃんがいて、出産で実家に帰って来て、まだ、春には少し早いからっていう寒い日に、元気な女の子を産んだのさ。可愛い子でね。おっぱいをたくさん飲んで、すごく元気な子だったよ。そうして、秋口、その子をつれて里帰りして、赤ん坊は、車にはねられて死んじまっただよ。

あんた達のように、落合さんちの敷地に勝手に車をとめたバカ野郎が居てね。でもね、落合さんはみんながブドウを楽しみにしてるんだからって、寛容だったんだよ。今と違って、そんなに車が多いわけじゃなかったからね。

ようやく、はいはいを始めたその子が、出ちまっただよ。外へ。そうして、ブドウを楽しんで帰るだけだった、親子連れの車に轢かれたんだ。

落合さんは悲嘆に暮れたさ。あんた達だって親なんだからわかるだろ。善意で停めさせてやってたのに、後悔したって遅かった。娘はそれつきり誰とも口を利かなくなって、離縁されて家にいるのさ。それだって、娘が元気なら、落合さんだって、老夫婦で娘と一緒に再起できたさ。でも、娘は、『自分のせいだ』って、何度も死のうとしてねえ。今だって、なんとかっていう、結構有名なその筋の病院を行ったり来たりさ。だから、留守が多いのさ。奥さんが亡くなった後はもう、年寄り一人で娘支えてるんだから、大変に決まってるさ。

あの事故のあと、ここはずっと荒れ地のままだったのさ。いつのまにか、観光農園なんて、廃れちまったからね。ずっと空き地だったのさ。そこを、行政が買い取って、なんと困ったことに保育園にするっていうじゃないか。近所はみんな『反対』だったんだよ。」

「反対…」

「そうさ、大反対。あんた、自分のうちの隣にある日、保育園ができませんよ、と言われて、『はい、どうぞ』って言えるかい？」

あんた、と言われたのは、川原裕也の父だった。裕也の父は、真つ赤な顔をして、腕組みしたままだ。

「そうだろ。誰だつて嫌さ。嫌いからねえ。おまけにね、あんなことがあつて、未だに、当時の事を引きずっている、落合さんちの境界線まで全部保育園だつて言うじゃないか。ほんと、たまげたよ。だから、この話が出た時は、それこそみんなで反対したさ。せめて、落合さんちの隣は、一軒分は空けてやつたつていいだろう。でも、それじゃ、認可に満たない大きさだからとかで、行政つてやつは、勝手な理屈つけやがつて、ここができちまったのさ。いいかい、ここはね、周りから見たら、迷惑施設でしかないんだよ。」

「迷惑施設でしかない…」

「そうさ。」

保護者のほとんどが顔を下に向け、ハンカチを握るもの、ズボンの裾を握るもの。涙をこらえる母親もいた。

「出来てみたら出来てみただ、そんなことがあつた場所に平気で停めてるバカがいる。」

「バカつてそういう言い方はないでしょう、知つてりや停めませんよ。それに、そんなに嫌なら、引つ越すとか、敷地を囲うとか、いくらだつて方法はあつたんじゃないんですか？」

そう言つたのは、毎日のように、大きな外車を停め続けていた、清水あやのの母であつた。

「バカが気に障つたのかい？ だけどね、もう現役を引退して、必死に子供の面倒みている年寄りに、どこに引つ越せつて言うんだい？」

どこに家の周りを修繕する金があるって言うんだい？そんな事を言うなら、あんたが出しておやりよ。」

「私はただ正論を言ったままで。」

「正論だつてえ。あんたね、そんな事を言うなら、この保育園が出て行きなよ。他にいくらだって土地あるだろ。ここじゃなくちゃいけないわけないんだから。さつさと居なくなっておくれ。」

そこまで言うと、緑川夫人は大粒の涙をこぼしていた。

「緑川さん、そうおっしゃらずに、落ち着いてください。」

堀田園長は、その場を収めるのに必死だった。必死で言ったのは、「それでも、この地に保育園ができるように尽力してくれたのは、ここに居る緑川さんなんですよ。一緒に落合さんのところに話をし下さつたりして。とにかく、緑川さんが居なかつたら、ここに、長坂保育園はないんです。」

皆の目が緑川夫人に注がれた。

「大きな声を出して、申し訳なかったね。だけど、」

緑川夫人は前を見据えて言った。

「自分の権利だけじゃ生きていけないのさ。だから、落合さんは必死で生きてる。車くらい、ちゃんと駐車場に停めるんだ。最近じゃ、コンビニの駐車場にまで停めてるっていうじゃないか。人の親なら、恥ずかしくない生き方おしよ。」

そう言つて、車いすを押して出ていったのだった。

「どういふ関係なの？」

綾子はそう言われて、

「関係なんてないわ。だけど、私、やっぱり間違っているのは私達だと思ふの。」

と云つた。

「なんだつて。」

綾子の突然の言葉に廻りの父兄は一斉に驚いた。まるで、裏切り者でも見るような眼だった。

「私が、保育園に子供を初めて預けようとした時、区役所で、無理

だつて言われました。理由、なんだかわかりますか？」

「……」

「定職があつて、収入があつたからです。」

「へえ……。」

「おかしいと思いませんか。私は、普通に働いて、普通に給料もらつて、収入があつて。でも仕事してるんです。収入があるなんて、そんなの当たり前のことなのに。だから、復帰するのに保育園に子供を預けたかつたし、なのに、収入があると、子供は保育園に預けられないんです。」

「無認可に預ける、つて事？」

「みたいです。収入があるのなら、認可の安いところに入れる必要なし、つて事みたいでした。ひどい話だと思いました。」

「なんだよ、入れたりよかつたじゃないか、無認可に」

川原裕也の父は言った。

「無認可に入れ（いれ）ましたよ。結果的に一年半後には認可に入れ（はいれ）ましたけどね。待つて待つてようやく。でも、いつつも疑問でした。」

「何がだよ。」

「だつて、必死で働いて、一生懸命税金払つて、その恩恵にはあづかれない、つて事ですよね。」

「しようがないだろうが、それだけ稼ぎがあるつてことだろ。」

「でも、入れました。一年半後に。その間、毎月八万円払い続けました。一年で百万。何のために働いているのか、わからない一年半」

「ほんとうよね、一年半で150万つて、なんなんだろうかねえ。」

「うまく言えないけど、やっと入れたんです。ずっと、ここで、みんなと仲良くやつて行こうと思いませんか？」

「思うさ、だけど、仲良くしたくないのは向こうだろう。」

「こつちが、世の中のルールを守れば、それで済むんですよ。ルールやマナーを守れば、みんな仲良く付き合つてくれるはずですよ。」

「みんな、少しずつ、守りましょ。世の中のルールを。」

その一部始終、事の成り行きを見守っていたのは隣の部屋で、おにぎりを食べていたみすず達年長の園児だった。時折、大人の大きな声が聞こえ、子供たちを不安にさせてのた。付き添っていた先生はいた。いつも子供たちを見守っているみすずの担任の遠藤先生と、パートの原先生だった。二人は、ドアのそばから子供を離そうとしたのだが、子供たちは、大人たちの唯ならぬ空気を察していた。そして、誰一人先生の言う事を聞かず、ドアの近くに立ちつくしていたのだった。

遠藤と原は、途中でその場から無理に子供を離すのを止めた。子供たちも、事の成り行きを見守る資格がある、と思ったからだ。緑川夫人が席を立つ頃、子供たちの中には、話が理解できるのか、涙をいっばいためる子供たちがいて、遠藤も原もたまらず、子供たちを抱きしめていたのだった。

子供と言うのは不思議なもので、親同士の刺々しい会話の中で、何が正しくて、何が間違っているのかを、理解できないだろう会話の中でも、しっかりと判断している時がある。子供だからと言って、親が言葉に注意しないと、子供から、まるで大人同士のように叱られてしまったりもする。今回の説明会も結局はそうだった。扉一枚隔てた向こうで、親がエキサイトするのと同時に、子供たちは親の無慈悲な会話に腹を立てていたのである。そうして、みすず達は、みすず達なりに実はある作戦を考えていたのであった。

翌日。

年長組の全員が、

「今日は歩いていきたい」

と言いだして、親を困らせた。車で通う全員が、

「ママ（パパ）車はパーキングに停めるんだよ。」  
と、注意する。

そうしたある寒い日、子供たちが園庭で、西側のその木々の向こう側に向かって、

「きよ〜し、この夜、星はひかり〜。」

と大きな声で一斉に歌いだした。慌てた職員たちは、大きな声で静止しようとして、園庭は騒動になった。

「何を大きな声で。歌は中でうたうよ。」

遠藤先生は、声の主たちを抱きかかえるように、その場から離そうとした。「また、怒られちゃうから。静かにして。」そう子供たちに言い聞かせていた時だった。

「だから、煩いって言うてるだろ。」

そう言って、落合さんの窓が開き、中から、いつもの怖いおじいさんが、子供たちに怒鳴ったのだった。

「頼むから、静かにしてくれ。」

その日、子供たちのほとんどが、やはり、落合さんのおじいさんの声にしり込みをした。皆が、一斉に引いたのだった。でも、引かないそう決心して、まずは、みどりちゃんが大きな声を張り上げた。

「落合さん。ごめんなさい。」

みどりちゃんは、大きく深呼吸して、もう一度言った。

「落合さん。ごめんなさい。」

すると、その声に合わせるかのように、子供たちが、一斉に、

「落合さん。ごめんなさい。」

と言ったのだった。落合さんは咄嗟の事に声が出なかった。声の出ぬまま、窓の外を見降ろしていた。

「だめだ。子供を使うなんて。お前たちはおかしいぞ。」

落合さんの怒りは、やはり収まりそうにない。どうやら、その『ごめんなさい』は、大人に言わされていると思ったようで、さらに怒りが増幅しそうになったのだった。

「きよ〜し、この夜、星はひかり〜。  
すくい〜のみこは、みははの胸に〜」

みどりちゃんの勇気のあとに、続いた子供たちの勇気が、クリスマス  
の歌となつて園庭の西側に響き始めた時だった。

窓を閉めようとした落合さん手を、そつと止める細い手があった。  
「幸恵……」

それは、子供を無くし、心を閉ざしていた落合さんの娘さんの細  
い手だった。

「眠りたもう、ゆ〜めや〜すく。」

まつすくな瞳は、落合さんの東側の窓をじつと見据えていた。

「きよ〜し、この夜、星はひかり〜。」

すくい〜のみこは、みははの胸に〜」

「うつつ……。」

落合さんの目から大きな涙があふれたのだった。

「泣いちゃった……。」

落合さん、泣いちゃったよ。

皆が口々に言いだしたとき、その窓の奥から、落合さんの娘さん  
が、そつと、窓の外に顔をだして、折れそうな細い手を振りなが  
ら、

「ありがとう。」

そつと呟くように言ったのだった。隣で、いつもの怖い落合さんは、  
その細い体を抱きながら、やっぱりいっぱい涙を流していたのだ  
った。

そんなこととは知らない大人たちは、

「やっぱり、そんな奴はほっておけない。」

「警察に相談した方がいい。」

そつと行って、迎えにやってきたのだけど、子供たちの自信に満ち

たその顔に、皆がびっくりしたのだった。

「ママ、きょうね。みどりちゃん、すごかったんだよ。アタシびっくりした。みどりちゃん、やっぱり凄い。」

「？」

でもそれはみどりも同じで、

「ママ、きいて。みすずちゃんね。すごくきれいな声でね、きよし、この夜つて、すごく上手に歌えるんだよ。みんなで歌ったんだよ。」

「？」

「落合さんに歌ってあげたんだよ。」

「！！！」

あれから、ほんの少しずつだけど、大人がマナーを守り始めて、子供たちが近所の人に挨拶をするようになった。園庭にあったロウブが解かれて、そうして、みすずがやりたくてたまらなかった雲梯で、こどもたちの、きゃっつきゃっとした笑い声が響くようになった。

「みて〜。落合さん。みすず、うんていできるんだよ！」

閉ざされていた落合さんちの東側の窓は、開け放たれている事が多くなった。

卒園の日。保育園に小さなバラのブーケが届いた。卒園時全員のそれぞれの胸につけられたそれは、隣の落合さんと緑川夫人からの贈り物だった。

皆が、その胸にバラのブーケをつけて、どの顔もその瞳を輝かして、そこに立っていたのだった。そうして、巣立った。

## 11 20年目の涙

20年。

そんな思い出から20年。相変わらず仲の良いみどりちゃんと、私は、同じ時期に結婚して、来年の春、殆ど同じ時期に母になる。みどりちゃんは、ママになるってわかったとたん、仕事を辞めてしまっただけで、私は嫁ぎ先で高原野菜を作り続けるつもりだ。

「あつ、もしもし、みどりちゃん。」

「みすずちゃん。いつこつち戻ってくるの？」

「え〜とね、あさつて。」

「あさつて。うわ〜楽しみ。同じ産院に通えるように紹介状、ちゃんと持ってきてよ。」

「大丈夫。着いたら連絡するからさ。ゆっくり話そうね。」

「わかったよ、時間はいっぱいあるからね。」

「うん。じゃ、その時ね。」

信州松本はもう、初氷が張った。大学時代の同級生と結婚して、この地に嫁いだ。朝晩の冷え込みが厳しくて、カラマツ林に霧氷を見るようになる、吐く息はもちろん白く、大きなおなかを抱えて、脚を滑らせないかと、結婚相手はもちろん、東京に居る父と母からも毎日のように電話がかかってきたりした。少し早いけれど、安全なうちに帰るといいよ、そんな優しい言葉に甘えて、7か月目に入るかどうかの頃に東京に帰ることになったのだ。

久しぶりの東京にワクワクした。あの頃の思い出が行ったり来たりする。よく覚えている、と言えば嘘になる。それが、本当に脳裏に焼きついた思い出なのか、大人達から聞かされた思い出話なのか、実は、まったくはつきりしない。でも、必死で通ったあの保育園の前を通過して実家に戻ろう。この子にも、あんな時間を過ごして欲し

い。そう、思つて懐かしいあの場所に立つたその時だった。

「えっ……」

みずずは言葉を失つた。

20年だ。20年という時が、ここまで変えてしまったのか。

長坂保育園のあの西側にあつた落合さんの家が無くなつていた。

いや、落合さんの家だけではない。その隣接していた何件かの民家はすべて無くなり、8階建のマンションが建つていた。見降ろされたように、長坂保育園はあつた。園庭は荒れていた。手のつけられていない庭木は伸び放題で、雑草に覆われた遊具があつた。隅には煙草の吸殻が散っている。どうやら、隣のマンションから投げ捨てられたもののような。子供たちの姿はなく、もちろん園舎に灯りのついている様子がない。

みずずを毎日苦しめた長い坂の方に廻つてみると、そこには入口のガラスが投石か何かで割られて、砕け散つたくすんだガラスの破片が散っていた。門のわきにはひっそりと、

『長坂保育園移転のお知らせ』

が掲示されていた。

茫然と坂を見降ろすと、その右側には懐かしい緑川家の大きな門がそのままに残っていた。みずずはなんとなくホッとして、その坂を下り始めた。ずいぶん前に、緑川夫人が亡くなつたと母に聞いたのだけど、その場所が残っていた事にホッとしたのだつた。でも、緑川家もまた同じだつた。表札が外され、その主と共に門の中のある大きな家は消えていた。聞けば、大きな不動産会社がここを買い長坂保育園敷地と合わせて、ここにもまた、マンションが建つ事になつたらしい。

時がすべて変えたのだと言えばそれまでだろう。だけど、あまりに悲し過ぎた。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8585s/>

---

落合さん、ごめんなさい

2011年5月8日21時12分発行